

# インターカルチャー

NO.61

1999年2月号  
FEBRUARY

## INTERCULTURE



学校法人 千里国際学園 Senri International School Foundation (SISF)

大阪国際文化中学校・高等学校 Osaka Intercultural Academy (OIA) 併設 大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS)  
〒562-0032 箕面市小野原西4丁目4番16号 TEL 0727-27-5050 FAX 0727-27-5055 URL <http://www.sisf.minoh.osaka.jp>

大阪国際文化中学校・高等学校  
Osaka Intercultural Academy (OIA)  
は、1999年4月より、  
千里国際学園中等部・高等部  
Senri International School (SIS)  
に校名変更いたします。

コメディ「ボールドソプラノ」公演  
公文国際奨学生に入選  
模擬国連に参加  
フルーツ高校の部全国2位入賞



撮影 斉藤 数(理科)

## 心の行方(2)

福田國彌

学園長・OIA校長

17世紀以来自然科学は、その成果を利用する技術との相乗効果によって急速に発展し、さらに産業革命による社会構造の変化や戦争によって発展が加速されました。とくに20世紀の科学技術の爆発的な発展は、資本主義自由社会の拡大と相俟って人間の生活環境を地球規模で変容させました。

20世紀初頭のPlanck定数 $h$ の発見は(光のエネルギー  $E = h\nu$ )、不確定性原理を媒介として人類にミクロ(量子)の世界を開きました。原子、原子核、素粒子、そしてその知識は原子爆弾や原子力利用の技術を生み出しました。また、半導体内のミクロなプロセスを利用するエレクトロニクスは情報理論と結合して、現在のコンピュータ社会を作りました。一方、戦争兵器として開発された大陸間弾道ミサイルの技術は宇宙探査衛星を生み、ガリレオが観測した木星の4つの衛星、イオ、エウロパ、カリスト、ガニメデの克明な映像を見せます。さらに、ハッブル望遠鏡は、数千光年彼方の星の誕生や死滅の有様、50億から100億光年の遠くにある銀河の存在を知らせます。

まさに、デカルトが「方法序説」で予言したように、無限の彼方にあるものも、また無限に微視的で隠されているものも、人間の精神が明らかにする・・・と思われれます。しかしながら、彼の認識した神の創造により生成変化する自然の秩序は、人間の精神が創造する物質的な環境によって破壊されようとしています。人間の精神は人間の欲望を制御しきれないかのように思われれます。

20世紀後半は生命科学の時代になりました。ワトソン(J.Watson)とクリック(F.Crick)による生体の「セントラルドグマ」、すなわち、DNAからRNAへの信号の転写とRNAが

ら蛋白質への翻訳という過程の発見は生命科学を急速に発展させ、生命技術は体細胞DNAを使ったクローン生物の誕生をも可能にしました。人間の精神は、果して、精神を宿す人間自身へのこうした技術の適用を阻止することができるのでしょうか。

生命科学はさらに、約1.4kgの物質・脳の中に精神の働きを見出そうとして進められています。科学者たちは身心一元論の立場を取っていると思われれます。しかしながら、2人のノーベル医学賞受賞者、エックルス博士(J.Eckles)とペンフィールド博士(W.Penfield)はその著書のなかで、長い脳研究の終に、果して魂は、心はこの物質のなかに存在するのか・・・という大きな疑問の壁の前に立たされたことを告白しています。

ペンフィールド博士は「てんかん」の治療の立場から、頭蓋骨を外して脳のさまざまな部位に電気刺戟を与えて脳の機能の研究をしました。とくに、前部前頭葉または側頭葉(言語野の外側)に電気刺戟を与えると、間脳(脳幹上部)に2次刺戟が伝わり自動症をひき起こすことを示しました。博士は多くの実験の結果から、間脳部の灰白質には、心に直結した仕組みの最高位の脳機構と自動的な感覚・運動を制御する機構とが存在すると結論しました。電気刺戟によって前者の機能が失われると、自己意識なしに行動する人間、すなわち、デカルトの自動機械人間が生れる。心と脳を結合する処がデカルトの言う松果体ではなくて間脳ということですが、ペンフィールド博士は、人間に意志的行為を行わせる心のエネルギーは何処から間脳へ入って来るのだろうか・・・と、大きな疑問を表明しています。

こうした考えに対して、心の仕組

みは間脳にあるのではない、人間の意識の機能は空間的にも時間的にも変化しながら脳の各部位と、とくに大脳皮質の連合野とで散在的に営まれるのだ、と主張する学者もいます。何はともあれ、脳の研究は21世紀における自然科学の最重点課題とされています。人間の精神の働きである自然科学が精神自体の在所を見付けることが可能なのでしょうか。さらには、こうして得られた科学上の知識が人間の心を制御する技術を生むのでしょうか・・・。

人間の脳のはたらきは、直観と深く関わる感性と、数学論理や自然科学を進める能力を持つ悟性と、自発的な意志や理想を形成する理性とから成ると言われています。その他に、脳幹部には、人間の生物としての生存を維持する機能や欲望が存在するそうです。また、ソクラテスの昔から現在に至るまで、止まることを知らぬ熾烈な金銭と名誉に対する欲望はどこから生れるのでしょうか。

私は、私の全身のなかに魂が、精神が、心が存在すると思っています。そして、魂は不死である、とは思っていません。心は屢々私自身にさまざまな言葉を語りかけます。私はそれらの言葉のなかから正しいと思うものを選んで行動しています。また、海に沈む夕日に向かうとき、山峡の道から青空に浮ぶ雲を望むとき、あるいは、午後の街角を歩いているとき、心は思いがけなく、私に素晴らしい言葉を話しかけてくれることがあります。わたしたちみな、そうした心が語りかける言葉を大切に、お互いの心うちにある素晴らしい言葉を交わすことができれば・・・と思います。21世紀の社会では、わたしたちの魂と、精神  
(次ページへつづく)

# 春に向かって

大迫弘和  
OIA副校長

寄せては返す波  
寄せては返す  
波たち 冬の海  
ひとつだけ新しい波が その中に  
  
いっしょに見つけれませんか  
  
ほら、  
あれが、  
それ  
(「Wave」浅木未知)

## 新カリキュラム 4月始動

このインターカルチャがお手元に届く頃、99年度の科目履修について、生徒の皆さんはいろいろと思案中ということになります。

学園が長い時間をかけ、ある意味学園としての力のすべてを注ぎ込み、よりよい教育環境の実現を目指して取り組んできました「千里国際学園新カリキュラム」がいよいよ4月より現実に動きはじめます。新カリキュラムの目的につきましても、これまで再三お伝えしてきましたので、ここでは繰り返すことはいたしません。が、「生徒ひとりひとりを大切に」という学園の基本テーマが、今回の新カリキュラムでより深く実現されるものと確信しています。

2月8日と12日に予定されております説明会では、4月からの時間割

を具体的にお示ししながら、いろいろお話しさせていただけると思っております。

新しい試みには、見ようによっては混乱の様にも見える様々な事態がつきものようにも思えます。可能な限り丁寧に科目履修の指導を展開していきますが、生徒の皆さんが最初はとまどいを感じることもあるかもしれません。しかし、本校には91年の開校以来、学園をゼロからここまで作り上げたつわものスタッフがそろっています。どうぞ信頼してついてきてください。また、このような変化の時こそ、保護者の皆様のご理解・ご協力が、本当に大きな力となり、お子様を支えていきます。そのことをどうぞよろしくお願いいたします。

## 高い本校への評価

1月から3月、高校3年生は自由登校になり学園が少さみしくなる中、教員は日々の教育活動に加え、入試を含め、99年度の準備に追われる期間に入っています。

幸いなことに昨10月、本校シアターで行われました「学校説明会」では、開校以来初めて、シアターに収容できなかったほどの人数の方々がいらしてくださいました。また、私が11月に回りましたアメリカ東

部、英国、ドイツというそれぞれの地域で、本校は、なんと高く評価されていたことでしょうか。長期の海外出張ゆえの若干の疲労は、各地域の方が大きな期待と信頼を寄せてくださっているという喜びと、その期待と信頼とに、真摯にこたえていかなければならないという責任をかみしめる思いとで、はるかかなたに飛んでいってしまいました。

まだまだ、もっともっと、知恵を絞って、皆で力を合わせて、少しでもよい教育を作っていかなければ。

一人一人の生徒を大切に。心を込めて、心を尽くして。

春はもうすぐ、そして必ず訪れるものです。

## 卒業式ご案内

なお最後になりましたが、本インターカルチャ最終ページにございますように3月6日、土曜日、午前10時30分より本校体育館にて第6回大阪国際文化高等学校卒業式を挙行いたします。ここにご案内申し上げ、皆様のご来校を心よりお待ちしております。

本校では、1998年度より、それまでの4学期制から各学期同授業日数の3学期制(60日×3)へと移行しました。4月～6月を春学期、9月～11月を秋学期、12月～3月を冬学期と呼んでいます。さらに1999年度からは、学期ごとに単位を認定する「学期完結制」を導入する予定です。

(前ページのつづき)

と、あるいは心と呼ぶものが、自然科学の作る技術をコントロールして、ジョン・グレンさんがディスカパリーの上で何と美しいことかと感嘆した地球が、地球上にいるわたしたちみなにとっても豊かな喜びを感じることでできる程美しくなって欲

しいものだと思います。

最後に、20世紀のフランスの詩人、ポール・ヴァレリ(P.Valery)の言葉を記します。「自己とは、内部の言葉のはじめての聴手」" Le Moi est le premier auditeur de la parole interieur "

# コメディ"ボールドソプラノ"公演成功！

オールスクールプロダクション 11月13・14・15日

大迫奈佳江  
音楽科・日本語科

開校以来、例年2月下旬に行われていた学校行事ミュージカルは、今年度より、OIA/OIS合同行事であることをより明瞭にするため、オール・スクール・プロダクションと呼ばれるようになりました。また、コモンカレンダー移行に伴って、その時期も11月中旬に変更されました。前回98年2月にミュージカル『リトル・ショップ・オブ・ホラーズ』があったため、今回は小規模なものを、ということで劇が計画されました。

9月秋学期が始まってまもなく、オーディションが行われ、9月21日よりパイリンガル喜劇『ザ・ボールド・ソプラノ』（ユージン・イヨネスコ作）のリハーサルが開始されま

した。その日以来、キャストのひとりひとりが、役者としてどれほど成長していったか、ここにすべて書き尽くせないのが残念です。この劇

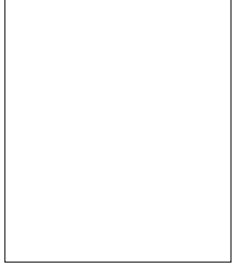
は、決して演じやすい劇ではありません。ストーリーなし。日常的。支離滅裂。現実との不調和・・・どの生徒も「どう動けばよいのか、どう言えばよいのか」を絶えず考えていました。監督（演出）のグール先生、助監督のカプラン先生の情熱的でプロフェッショナルな指導と激励があったからこそその演技ですが、それぞれのキャストの努力は大いに賞賛を受けるものとなりました。キャストの想像力とその精力は、ステージ上で見ることができますが、制作に携わったスタッフの才能と努力は、まさに縁の下の力持ち。それもプロフェッショナルな仕事をする人ばかり。監督、助監督、舞台進行を始め、舞台デザイン、装置、照明、音響、衣装、メイク、音楽、小道具、バックステージ等、間接的にステージと関わって下さった方々。翻訳、ポスター作成、プログラム・チケット作成の仕事をして下さった方々。上演当日のビデオ撮影、受付・案内の仕事をして下さった



方々。他にも、衣装を貸して下さったり、寄付をして下さったり、お手伝いして下さったりと、大勢の方々が協力して下さいました。どんなことをするときでも、何かをするときには、そこに意志が働き、実行が伴います。今回のような小規模なプロダクションでさえ、70余名の人がいるいろいろな形で関わって来ました。改めて、キャストとスタッフの皆さんに感謝の意を表し、大成功に拍手を送りたいと思います。そして、四百数十名の観客の皆さん、観に来て下さってありがとうございました。1998年11月、あなたが千里国際学園でしたこと、そして、あなたが千里国際学園でみたもの、『ザ・ボールド・ソプラノ』はあなたの一生の思い出となることでしょう！



フライジング  
 <連載> ドイツFreisingからこんにちは！



## なかったことにはできない話

山本美千代  
 国語科

少し前に、Bavarian International School が Haimhausen のお城に引越したというお話をしましたが、そこにはおよそ60人の教職員が働いていて、その95%は車で通勤しています。私は、残りの5%のひとりで、車を持っていないどころか、運転免許もありません。「じゃあ、どうやって通勤しているの？」と何度も尋ねられました。もちろん、列車（1時間に3本）とバス（1～2時間に1本）で通勤しているのです。

Freisingから各駅停車の列車で15分。4つ目の駅、Lohhofで下車し、Haimhausen行きのバスに乗り換えます。バスはしばらく大きな道路を走り、5分ほどで分岐点にさしかかります。そこには、「Freisingまで22km」「Dachauまで14km」という標識が立っています。バスはDachau方向に曲がり、広大な畑を左右に見ながら一本道を数分走ると、Haimhausenです。

この分岐点でバスは必ず速度を落とすので、そこにある標識にふと目がいくことがあります。そして、その度に、私は少しはっとします。Dachauという名前に反応してしまうのです。その町には、かつて、ドイツで最初に建てられた強制収容所があったのです。

Dachau(ダッハウ)はミュンヘン北西部にある古い町で、旧市街の丘の上には16世紀に建てられた宮殿があり、丘のふもとに広がる町は、バイエルン州の他の町と同じように、落ちついた美しいたたずまいを見せています。でも、この町を訪れる観光客の多くは、町の北東部にある強制収容所跡(KZ-Gedenkstaette)に向かうのです。

「KZ」というのは、「Konzentrationslager(強制収容所)」の略記です。ダッハウのKZは、後年ナチスが占領した東部ヨーロッパに作られたアウシュビッツのビルケナウやトレブリンカのような、「Vernichtungslager(絶滅収容所)」ではありません。政権を握ったナチス・ドイツにとって不都合な、反政府的な人々、聖職者、ユダヤ人などを「国家の敵」として隔離収容するという目的のために、1933年、ドイツ国内で最初に建てられた収容所だったのです。その後、ドイツ国内には大小のKZが次々に建てられました。ダッハウ

は、南部のセンターのような位置を占め、ニュルンベルクやザルツブルクからも囚人が移送されていました。

「ダッハウ強制収容所追悼祈念資料館」の資料によれば、1933年から1945年までの間に、20万6,000人以上の被収容者の名前が記録されていますが、ダッハウ経由で他の収容所に送られた人々の数はわからないということです。この収容所で亡くなった人々の数は、公式には31,591人です。しかし、記録に残されずに銃殺された捕虜の数は数千名にのぼると言われています。ここに挙げた数字を多いと感じるか、少ないと感じるかは人それぞれでしょう。500万とも600万とも言われるユダヤ人の犠牲者に比べれば数としては「少ない」でしょう。でも、ひとりひとりの「人の死」はそれぞれに「絶対」であって、「数」として平均化されたり相対化されたりすることを拒んでいるとも思います。

私たちは、自分にとってかけがえのないひとりの人を失った時には、言葉にできないほどの怒り、悲しみ、肉体的な苦痛を伴う喪失感を感じます。しかし、名前も知らない人々が、行ったこともない場所で、何十人、何百人殺された、何万人、何十万人死んだと聞かされても、それは「数字」として、「記録された事実」として、「抽象的な悲劇」として頭の中に入ってきます。自分の経験と重ね合わせて、想像力の助けをかりて、やっと具体的な「人の死」を思い描くことができるのです。(世の中には、そんなもどかしい手続きを経ずに、どの人の死も自分にとってかけがえのない人の死として感じられる人もいますでしょう。だから、「私たちは」ではなく、「私は」と言うべきなのかもしれませんが、そのような人は本当に少ないのが現実ではないのでしょうか?)

私が最初にこの収容所跡を訪れたのは、1997年の夏が終わる頃でした。監視塔と有刺鉄線に囲まれた敷地には、その真ん中を貫く、青々と茂るポプラ並木と復元された囚人用バラックが一枚あるだけで、あとは何もかも空気が広がっていました。空は青く、吹く風はさわやかで、私の頭の中に浮かんできたのは「夏草や兵どもが夢のあと」

という芭蕉の句でした。「ちがう、ちがう！」とは思ったのですが、すでに浮かびあがってきた句はもう頭にこびりついてしまい、消し去ることはできませんでした。

敷地の端にある資料館に入るまえに、壁際にあるSS(ナチス親衛隊)の「監視室」を見ました。それは、この収容所のただひとつの門に隣接しており、門扉には、あの悪名高い標語、「Arbeit Macht Frei(働けば自由になれる)」が掲げられていました。

資料館の内部はいくつかの部分に分かれていて、さまざまな資料を展示しています。1920年代末、ナチスが台頭してきて、権力を握るまでの経過から始まり、1933年のナチス政権誕生以降の経過、ダッハウ強制収容所の設立とその実態、さらに、後年の絶滅収容所へのユダヤ人の強制移住の状況、そして1945年の解放まで、写真と資料が整然と展示されています。

展示のはじめの方にある写真には、19世紀ドイツの詩人、ハインリヒ・ハイネの予言的な言葉が添えられています。"Das war ein Vorspiel nur; dort wo man Buecher verbrennt, verburennt man auch am Ende Menschen"(それはプロローグに過ぎなかった。書物が焼かれるところでは、最後には人間もまた焼かれるのだ。)そこにあったのは、1933年5月に、ナチスが行った大規模な焚書の写真でした。マルクスやフロイトはもちろん、ケストナーやツヴァイクの作品も焼かれました。

資料の展示は、ヴァイツゼッカー(ドイツ連邦共和国第6代大統領)が引用したことで有名になった、スペインの作家Santayanの言葉で締めくくられています。"Die dich des vergangenen nicht erinnern, sind dazu verurteilt, es noch einmal zu erleben." (過去を覚えておこうとしない者は、過去の過ちを繰り返し、裁きを受けることになる。)

すっかり重苦しい気分になって外に出ると、そこにはやっぱり青い空が広がり、なんにもない空き地にポプラ並木がまっすぐに伸びていました。そこが、「収容所通り」という名で呼ばれていたことも、ポプラは囚われていた人々が植えたものであることも、資料館で教わりました。50年を経

て、見事に育った並木の両側には、かつて収容人数の何十倍もの人々が詰め込まれたバラックがぎっしりと建ち並んでいたことも。

この収容所の敷地の外には大きな火葬場があり、そこにはシャワー室に見せかけたガス室もつくられましたが、実際には使用されなかったということです。しかし、他の方法で何万人の命が奪われたのですから、ガス室が使われなかったことはなんの慰めにもなりません。それでも、使われなくてよかったと、素朴な感想がわいてくるのはいたしかたのないことです。火葬場の庭には、小さな銅像があります。痩せこけた人が囚人服のポケットに両手をつっこんで、遠くを見つめてたらずんでいる像です。台座には「死者には敬意をこめて/生者には忘れぬように」とありました。

ダッハウだけではなく、このような資料館・博物館は、収容所のあった多くの町に建てられています。過去を忘れないために、半世紀以上たった今も、お金と労力が費やされているのです。

「ああ、もうそんな話はうんざり！自分が生まれてもない頃に、二つも三つも前の世代が犯した罪の話を、なんで私たちが勉強しなければならぬ？自分には関係ないし、そんな昔のことなんか知りたくもない。嫌な気持ちになるだけ。ああ、うっとしい！」

ドイツにも日本にも、こんなふうを感じる人はたくさんいます。でも、被害者でも加害者でもない世代だからこそ、過去の事実をまっすぐに、冷静に見つめることができるし、被害者にも加害者にもならず、さまざまな人間が共生できるような社会を、世界を夢見ることでもできると考える人もたくさんいます。

私の中にあった「人間が同じ人間に対して、こんな非人間的なひどいことができるなんて信じられない！」という素朴なヒューマニズムは、第二次世界大戦後も世界各地で絶え間なく起きた、あるいは起きている、戦争、武力衝突、むき出しの暴力の結果を何度も何度も見せつけられていくうちに、「人間だけが、同じ人間に対してこれほど残酷で無慈悲な仕打ちができる。しかもその残酷を楽しむ。」という事実認識に打ちのめされて、もうふらふらです。でも、そんな人間のむごい仕打ちを止めさせることができるのもやはり人間であり、どんな悲惨な状況にあっても、珠玉のように美しく輝く人間の営みは確かに存在したという事実もまた厳然としてあるのです。

ダッハウを見学したあとには、すっかりどよんとした気分になって、その日はごはんもおいしく食べられませんでした。「あれは過去の出来事で、よその国の出来事で、特別に残酷なナチスと

いう組織が狂気の果てに行った行為なのだから、普通の社会生活を送っている自分には関わりのないことだし、将来も自分は絶対にそんなことには荷担しない！」と言い切ることができる人もいるでしょうが、私はそんなに清廉潔白で正々堂々とした正義の人にはなれません。

どんなに多くの良心的な普通の人々が戦争や残虐行為の実行者達に「だまされて」、決断と行動の白紙委任を与えていたかを私たちは知っています。多くの心優しい人々は本当に「なにも知らなかった」のかも知れません。恐怖と暴力で支配される状況に置かれ、自分の判断力を放棄しなければ、命の保障はないという立場に追いつめられたら、「なにも知らない」というシェルターに逃げ込みたくなるのかも知れません。

私は、自分の弱さ、卑怯さ、いじましさをよく知っています。罪のない人に向かって、積極的に石を投げつけることはなくても、それを見て見ぬふりをして、「私にはどうしようもない、関係ないことなんだから」と、その場を急いで離れていくかもしれないし、さらには、「あいつに石を投げつけないと、今度はお前に石を投げつけるぞ」と脅されたら、石を手にとるかも知れません。そんな危うさが自分の中にもあることを知っています。それは、過去の人々の心理ではなく、今の私たちにもお馴染みの心の動きではないでしょうか。

でも、そんな弱さを言い訳にしなくてもいい世の中に暮らしたい、人間の嫌な面、汚い面がむき出しにならずにすむような社会に暮らしたいと思ったら、ただ黙って「なんにも知らないシェルター」に逃げ隠れているだけではすまないということにははっきりしています。

伊丹万作は1946年にこんな発言をしています。「だまされた者の罪は、ただ単にだまされたという事実そのものの中にあるのではなく、あんなにも造作なくだまされるほど批判力を失い、思考力を失い、信念を失い、家畜的な盲従に自己のいっさいをゆだねるようになってしまっていた国民全体の文化的無気力、無自覚、無反省、無責任などが悪の本体なのである。……そして、このことはまた、同時にあのような専横と圧制を支配者にゆるした国民の奴隷根性とも密接につながるものである。」

この強烈なことばをもって、伊丹万作は半世紀後の今を生きる私たちにも全く同様に檄を飛ばしています。その檄に答えるのは、しかし、とても困難なことではあるのです。けれども、少なくともこのことばが「檄を飛ばしている」と受けとめられるほどの分別と知識を私たちは持っています。

そして、それは教育の「成果」だと私は思っています。なにかと批判にさらされている「戦後教育」ですが、「個人の尊厳、基本的人権の尊重」という理念を擦り込まれたことは、人間と時代と世界を見る視点の獲得という点で、無駄ではなかったと思います。

この冬、大雪が降ってどこもかしこも真っ白なお布団におおわれたようになった日の翌朝、久しぶりに青空が広がるいいお天気になったので、私は再びダッハウを訪れました。冷たい風の中をズボズボと雪を踏み分けながら収容所跡に向かいました。そこにはやっぱり、葉が落ちたポプラ並木と雪で真っ白になった敷地があるばかりでした。

見学を終えて帰る私の頭にこびりついていたのは、ボブ・ディランの歌でした。

The answer, my friend, is blowin' in the wind

The answer is blowin' in the wind

「答えは、風に吹かれている」というこの歌もまた、人間と時代の関わりを問い続けている歌でした。

小さな町のはずれにある、忘れてしまいたい過去の記憶をつなぎとめる施設。なかったことにはできないことが世の中にはあることを静かに語り続ける施設。「個人の尊厳」や「人間性」がいかにはかなく、壊れやすい概念であるか、いかにたやすく踏みじられるものであるかを繰り返し訴える施設。でも、その施設は、だからこそ、それを奪われずに、踏みじられずに生きるにはどうすればいいのかを問い続けているようです。

(追記)文中のドイツ語文には、日本語の定訳がありますが、手元に資料がないため参照することができませんでした。正確な翻訳を知りたいと思われる方は、ぜひ、原典に当たって確かめて下さい。ハイネの文章は、1820年の著作からの抜粋です。ヴァイツェッカーの発言は、岩波ブックレットに収録されているはずですが。

また、ボブ・ディランの歌は、中高生のみならずにとっては「フォーク・ロックの古典」のようなもので、「そんな歌知らない」と言う人がほとんどでしょう。興味のある人は、これもぜひ、原曲に当たってみて下さい。

山本先生は、1997年8月よりドイツのBavarian International Schoolに2年間勤務され、その後本学園に復帰される予定です。

# オーケストラ近畿総合文化祭で奨励賞

## Saber Symphony Sparkles

Stephen Bonnette

Music

Members of the High School Saber Symphony participated in an exciting and rewarding event on Sunday, November 29th. We were chosen last spring to represent our district in the Kinki Sogo Bunkasai, hosted this year by Yuuhigaoka High School. Students from the High School String Ensemble combine with select players from the Wind Ensemble each fall to explore the rich repertoire which exists for symphonic orchestra. Our program this year consisted of the challenging Academic Festival Overture by Johannes Brahms.

This was an extremely ambitious project for a high school ensemble and the students' dedication and diligence was impressive. The performance was a showcase for our

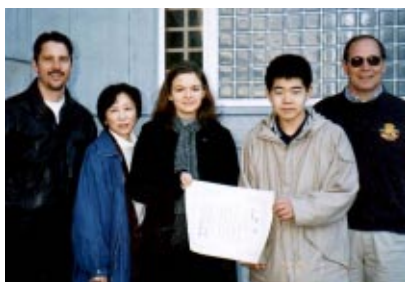


instrumental program here at OIA/OIS, and we as a music faculty were very proud of our students' accomplishment. Well done Sabers!

An interesting side-light to the day's performances was a question and answer session held during intermission. Our school was featured due to our unique international makeup. Students from other schools were very curious about our daily school life, and it was a nice way to share our common experiences and explore our differences.

The Holiday Concert

On behalf of the music faculty, I would like to congratulate all the music students involved in the Holiday Concert which took place Tuesday, December 15th. The High School Wind Ensemble, String Ensemble, Saber Symphony and Chorus performances were of the highest quality. The program displayed the varied and challenging repertoire that students have focused on this autumn. The many hours of individual practice and ensemble rehearsal were evident as the audience enjoyed a delightful evening of music making.



奨励賞を手にした生徒代表と音楽の先生方



## THE BOOKSTORE NEWS

February 1999



ブックファースト大阪駅前店でご利用いただけるギフトカード(1000円券)を950円で販売いたします。皆様のご利用をお待ちしています。  
イヤブックをまだ申し込まれていない方はお急ぎ下さい。

# 男子バスケット女子サッカーともに2位

インターナショナルスクール関西リーグトーナメント (1/21・22)

千里国際学園のチームスポーツは大阪国際文化中学校高等学校(OIA)と大阪インターナショナルスクール(OIS)の2校で1チームを編成しており、この形態での参加を認めるインターナショナルスクール関西リーグとAPAC(Asia Pacific Activities Conference)の公式試合等に参加しています。

<I.S.関西リーグ参加校>

カナディアンアカデミー(神戸)、マリストブラザーズ(神戸)、名古屋インターナショナルスクール(名古屋)、E.J.キング(佐世保)、M.C.ペリー(岩国)、千里国際学園(大阪)

<APAC参加校>

北京インターナショナルスクール(中国)、上海インターナショナルスクール(中国)、ブレントインターナショナルスクール(フィリピン)、ソウルフォーリンスクール(韓国)、カナディアンアカデミー(神戸)、千里国際学園(大阪)

(注)「大阪セイバース(The Osaka Sabers)」は千里国際学園スポーツチームの愛称です。

## Kansai Tournament results

Mark Pekin  
Athletic Director

### Boys Basketball

- First place Canadian Academy
- Second Osaka A
- Third Nagoya
- Fourth Osaka B
- Fifth YMCA
- Sixth Marist

(今回YMCAは招待校)

### Free throw Contest

- First place Taku Harada (Osaka A)

### All Star Team

- Osaka B Chris Koyama
- Osaka A Christopher Tse

### Cheerleading

- First place Osaka and Canadian Academy (Joint Champions)

### Girls Soccer

- First place Canadian Academy
- Second Osaka
- Third Marist
- Fourth Nagoya

The Kansai Tournament was very successful and had some extremely exciting matches. The two Osaka teams, coached by Mr. Peter Heimer performed very well, and both the players and coach are to be congratulated on their level of play and preparation before and during the tournament.

The Osaka Cheerleaders are to be congratulated on winning the Kansai Cheerleading competition this year. The girls have worked very hard over the past three months and put on some

very entertaining and athletic routines during the tournament. Well done Saber Cheerleaders!

## APAC tournament

The girl's soccer team and boy's basketball have been practicing very hard over the past 5 weeks in preparation for the next APAC tournament. The girl's team will travel to Seoul, Korea and the boy's to Beijing, China the first week of February. Both these tournaments should be very exciting and the teams are confident of a very good performance.

I would like to take this opportunity to thank the parents for their support of the APAC program. The standard of play and intensity of competition is getting better at each event and our teams are accepting the challenge by working hard at practice and improving their individual and team skills. All of the APAC tournaments have been very positive experiences so far and I look forward to the continued support of the parents, students and faculty.

Good luck to the coaches and players in Seoul and Beijing. The spring APAC event will be the Boy's Soccer/Girl's Basketball and Tennis tournaments. The venue is Brent School Manila, Philippines, April 14 - 18.



## 第8回「ミルク募金」へのご協力に深謝いたします

栗原真弓  
カウンセラー

恒例の「ミルク募金」を12月1日から9日まで実施いたしました。今回は中学1年生と2年生の両学年に、準備と募金活動を担当してもらいました。学園内のあちらこちらに掲示されたポスターや募金箱は、どれもユニークな作品でした。いつも子どもたちの発想の奇抜さとエネルギーに驚かされます。みなさんも楽しめましたでしょうか。

お蔭で、募金の総額は、¥81,000でした。学園関係者の方々の心温かいご援助に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。これらの募金は、今回もインドのカルカタにあるマザー・テレサが建てた『孤児の家』に直接届けていただくことになっています。

今回の活動で、いくつか印象に残ったことがありました。ポスターを製作していたとき、生徒の一人が「どのくらいのお金で子どもたちを救えるの?」というとても大切で素朴な質問をしてくれました。「具体的なことをポスターに書きたいから」ということで、毎年募金をインドに届けてくださっている是枝律子さんに現地の様子を伺いましたところ、5円で乳児の1週間分のミルク代を賄えることを知りました。物価が大きく違うことは分かっていましたが、この情報には生徒も私も大変驚きました。このことは、集計作業でたくさん硬貨を扱うときに、1円でもおろそかにできないという姿勢にも繋がりました。そして終了後、「毎日募金箱を覗いて、少しでも募金が入っているとすごく嬉しかった。お金に添えられたみんなの心が嬉しかった」という感想文がいくつ

も寄せられたのは、何より感激でした。

生徒自らの発案で、インターナショナルフェアで手作りのお菓子を売って募金活動してくれた人もいました。休日にも頑張ってくださいました生徒のみなさん、どうもありがとうございました。また、毎年忘れず募金を寄せてくださる保護者や事務局の方々、学園祭の収益を寄付してくださいましたホームルームのみなさん、どうもありがとうございました。

マザー・テレサは、「愛が本当のものであるためには、なにも特別なものでなければならぬと思つてはなりません。私たちに必要なのは愛し続けることです。どうやってランプは燃えるでしょうか?油が少しずつ、たえず芯に滲みてくるからです。油が全然滲みてこなくなれば、光もなくなります。みなさん、私たちのランプにとって、この油の一滴一滴は何でしょうか?それは毎日の生活の些細な事どもです。誠意を尽くすこと、時間を守ること、優しいことばをかけること、つまり他人のことを思いやることであり、その結果出てくる、見たり、話したり、行動したり、黙ったりする私たちなりのやり方なのです。ランプの手入れをよくください。真の愛が見えてきます」と語っておられます。

あなたというランプを灯すのは、あなた自身に他なりません。一つ一つのランプはどれも貴重でかけがえない存在です。素晴らしいランプを授かっているのですから、油を絶やさないようにして、炎を灯し続けてあげましょう。ランプの炎は自分

を輝かせるだけでなく、周囲の人にとっても明るい光となり、支えとなります。年頭に当たって、マザー・テレサのことばの中から、特にこの一節を紹介させていただきました。毎日の生活の些細な事どもをこそ大切にしていきましょう。

## 車椅子マラソン 2年連続優勝

トライアスロンクラブ 金澤智子さん(中2)

下村啓三  
事務局



11月15日(日)、霧煙る琵琶湖畔で行われた「第八回ふれあい琵琶湖マラソン」に、中学2年生の金澤智子さんが参加され、昨年に続き見事車椅子一般女子の部(4.2195km)で優勝されました。このマラソンは障害者・健常者ともに気軽に参加でき、ふれあいを大切に、お互いを尊重しあいながら競技を行う大会です。

デフェンディングチャンピオンとしてスタートした金澤智子さんは、昨年の経験を生かして自己のペース

を保持し、小さな坂も簡単にクリア、下り坂においても素晴らしい走りで行きつけのゴールへと向かいました。タイムは25分36秒、昨年のタイムを5分余短縮する記録でした。ゴール後も最後のランナーを暖かく拍手で迎えるなど、自己記録への挑戦だけでなく他の選手とのふれあいをより深く感じた大会となりました。

今回もミュンヘン五輪金メダリストのフランク・ショーターさんが参加され、暖かいメッセージを参加者に送っておられました。一部を紹介させていただきます。

「私達ベテランランナーは、道路を単に走るという行為がどんなに幸せな事なのかを時々忘れがちになります。昨年、障害をお持ちの多くの

選手と一緒に走ったとき、私はこの事に思い起こされました。私は彼らの決心とチャレンジ精神に本当に感銘を受けました。そして、すべての参加者のゴールは皆同じように大切に意義のあることです。障害をお持ちの選手達にとって、参加しゴールをするという事はオリンピックのゴールと同じです。」

金澤智子さんの声

「11月15日に琵琶湖ふれあいマラソンという大会がありました。この大会は私がマラソンを始めるきっかけになった大会です。その大会の一般女子の部で2年連続優勝することができました。この大会の優勝は他の大会と違ってたくさん車椅子の選手がいる中での優勝なので喜びもとても大きいです。その上、タイムも5分位縮まって表彰式のときは最高の気分でした。これからも水泳やマラソンを楽しく続けていきたいと思っています。」

## 高校生3名がハーフマラソン完走

トライアスロンクラブ 長俊介君・高橋ひろみさん(以上OIS12)・野平志乃さん(高2)

馬場博史  
数学科

中2の金澤智子さんが琵琶湖で優勝した同じ日に、吹田万博国際マラソン(11/15)では、3名の高校生、長俊介君・高橋ひろみさん(以上OIS12)・野平志乃さん(高2)が、本学園の生徒としては初めてハーフマラソン(21.0975km)を完走しました。さらにOISのCarol Bendall先生も

同じく完走されました。おめでとうございます。

また、壮年男子の部10kmでは、John Searle先生(体育科)と私(馬場)がそれぞれ7位と9位に入賞、他の参加者も全員が完走しました。



ハーフマラソンを完走した3人

# 吹田駅伝は3チーム入賞

ランニングクラブ・トライアスロンクラブ 一般男子・中学女子チーム

馬場博史  
数学科

1月15日(祝)は冷たい雨に見舞われ、とても寒い一日でしたが、万博記念公園で開催された吹田市駅伝競走大会に、ランニングクラブ・トライアスロンクラブを中心に4チームが参加しました。

教員・高校生混成のチームが一般男子の部で6位に入賞、さらに中学生女子A・Bチームが、それぞれ8位と9位に入賞しました。中学男子チームも全員初参加ながら、無事完走しました。応援にきてくださったご家族のみなさんありがとうございました。

< 駅伝参加者 >

女子の部(2.2km x 5人)

中学女子チームA

長みさき(中2)、乗岡彩、山田蘭子、阿部有香、安藤ゆかり(以上中1)

中学女子チームB

松田杏子、前野ケイティ、上地芽里沙、前成美(以上中1)、金澤智子(中2)

男子の部(4km x 5人)

中学男子チーム

藤本卓、岡本竜平、山田啓司(以上中1)、生野利典(中2)



一般男子チーム

長俊介(OIS12)、佐藤直仁(ランニングコーチ)、John Searle、Mark Pekin、馬場博史(以上教員)

## 学校伝染病について

松井尚子  
保健室

本格的な寒さのなか、かぜやインフルエンザなどにかかり、つらい思いをしている生徒の皆さんも多いのではないのでしょうか。インフルエンザで学校を休むと、出席停止という扱いになって普通の欠席と数えられないのを知っている人は多いと思いますが、もう一度この学校伝染病について説明しておきます。

下記にあげる伝染病は、学校保健法によって指定されていて、医師の証明があれば休んだ期間は欠席に数えられません。ただし、学校には通常の欠席のように毎朝連絡を入れてください。学校伝染病

がよくなって登校するときは必ず医師の許可をもらって登校するようにしてください。

「学校保健法による学校伝染病指定」

第1類：

コレラ、赤痢、腸チフス、パラチフス、痘瘡、発疹チフス、しょう紅熱、ジフテリア、ペスト、流行性脳脊髄膜炎、日本脳炎

これらは法定伝染病として入院、隔離が必要。

第2類：

インフルエンザ、百日咳、麻疹、ポリオ、ウイルス性肝炎、流行性耳下腺炎、風疹、水痘、咽頭結膜炎

第3類：

結核、流行性角結膜炎、急性出血性結膜炎、伝染性紅斑(リンゴ病)

インフルエンザなどは、かなり予防効果の高い病気です。毎日の睡眠、バランスの良い食生活、部屋の換気、空気の加湿、そして手洗いとうがいをよくすることで、ウイルスをやっつけてしまえるような体の抵抗力をつけたいですね。お互いに。

&lt; 保護者OBからの風 &gt;

## 忘れられない入学式

白石邦子

第3期卒業生保護者

わが家では娘が小学校4年生の秋に、主人の転勤でイギリスに渡り3年後に帰国しました。初めての海外生活ということもあり、最初の1年間は日本人学校に通わせましたが、後の2年間は思い切って現地の女子校に転校させました。日本人はほんの数人しかいませんでしたが、とても暖かくむかえてくださり、娘もすぐに溶け込んで親子ともども本当に貴重なかけがえの無いたくさんの体験をすることができました。反面、帰国してからの学校のことは常に悩みの種でしたが、そんな私たちを救ってくれたのが千里国際学園でした。ロンドンで開かれた学校の説明会で藤沢先生にお会いしてお話を聞き、これで安心して日本へ帰れると心から安堵したものです。

今でも入学式(開校式)のことは忘れることが出来ません。何もかもが真新しく、広びろして明るくてモダンな校舎にほんのわずかの生徒たち。それぞれ個性あふれるスタイルで、子供達が過去に生活してきた様々な国の旗がたなびき、国歌も校歌もない実にほのぼのとした式でした。

学校の行事も千里国際学園ならで

はの楽しいものがいっぱいでした。とくに、生徒たちによるプロも顔負けのミュージカルは本当に素晴らしい物でした。おいしいディナーのサービスもあり、普通の学校ではなかなか経験出来ないことだと思います。娘が特に入れ込んでいたのがサマーキャンプ。高3のときにはとうとうMD(Management Director)をやりとげ、身も心もくたくたになりながらも本人にとってとても大きな収穫があったようです。

千里国際学園でお世話になった5年間、親としては本当に何もしていません。娘が自分で考え自分で決め自分で行動する、その姿にちょっぴりさみしさを感じながらも頼もしくおもいつつ、夫と二人で安心して見守ってこれたと思っています。

英語のほうは、5年間で忘れるどころかますます磨きがかかり(親の欲目です)今は自ら選んだ大学でも充実した毎日を送っています。

今少しずつ学校も変わっているようです。先日、箕面に住んでいる友人とおしゃべりしているとき、娘が千里国際学園の出身だと言うと「すごいじゃない。あの学校は近所の奥様達の憧れの的で、みな必死に

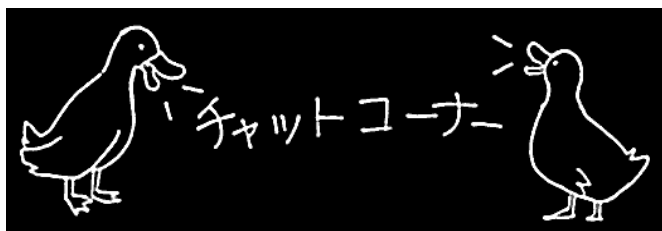
なって入れようと頑張ってるのよ。娘さんすごく良くできるのね。」と感心されてしまいました。こんな風に言われてうれしくない親はいないと思いますが、娘が入学したころのことを思うと何か複雑な思いもしました。

時代の流れに沿って学校が少しずつ変わっていくのは仕方のないことですし、評価が上がっていくことも大切なことかもしれません。でも帰国子女受け入れ校という千里国際学園本来の目的は、絶対に失って欲しくないと思います。海外で生活してきて不安でいっぱいの子供も達が、安心して学ぶことが出来るような学園であり続けて欲しいと心から思っています。

### 募金のお礼

ハリケーンミッチによる被災国ホンジュラスへの募金合計が158,528円になりました。12月1日にホンジュラス赤十字に送金いたしました。お手伝いいただいた方々、バザー用品を出して下さった方々、募金して下さった方々に紙面をお借りしてお礼申し上げます。

ayuda a centro americaの会



### ちょっぴり優雅な師走

12月初めに友人がイギリスからクリスマスカードブックを送って来てくれました。年賀状の記録帳のようなもので、アルファベット順に氏名、住所、出した日付、受け取った日付が記入できるようになっています。早速このノートを活用し、毎年クリスマスカードを頂く人の名前、住所を書き整理してみました。なかなか便利で、効率よくクリスマスカードを送ることができ満足でした。

さて次は年賀状。わが家のオリジナルの文面を考え、手書きで住所を書くのが例年のスタイル。200枚の年賀状に住所を書くのがいつも大変でおせち料理を作る前に手がくたくたになってしまいます。今回はいざパソコンで思い立ち、住所と文面を作り印刷。心がこもっていないと言われればそうかも知れませんが、あっという間に200枚ができあがり、いつも年末ぎりぎりまでかかる年賀状書きは、クリスマスまでに仕上がりポストへ。これも大満足。パソコンのデータの中に「出す」「受ける」「喪中」全てを記録してくれ便利です。

このクリスマスカード便利ノートとハイテク技術のおかげで毎年恒例の大作業もスムーズにやっつきのけられ、締切直前まで奮闘しているいつもの自分とは大違いでした。クリスマスや暮れもゆっくり過ごせ、師走にリッチな気分になれ、これまた大満足。町のイルミネーションもより一層美しく感じられましたよ。

(K・A 7・10年生保護者)



### バラ売りおばさんのつづき

11月28日のインターナショナルフェア（IF）に行かれましたでしょうか？そして玄関ホールで美しいバラの花束をお買い求めになられたでしょうか？そう、私は恒例になりましたバラの販売をしている「滋賀県親の会」のメンバーで

す。なんとJR東海道線で滋賀 - 京都 - 大阪を股にかけて通学している12名の保護者の会なのです。この中には「あけぼの寮」（千里国際学園の生徒寮）に入っている生徒や下宿している生徒もいます。長距離通学や親元を離れてもこの千里国際学園での学生生活を望んでいる子供と、それを認め支えていこうという保護者の学校への思い入れは大変深いものがあります。ただ、遠いために魅力的な学校行事や講演会等に参加できないことが多く、メンバーの悩みとなっています。

そんな私たちでも、IFで何かできることはないかと3年前からバラの販売をする事になったのです。滋賀県はバラの生産地で事前に栽培農家数件をお願いをしておいてIFの前日か当日の早朝花を引き取りにいき、名神高速をぶっ飛ばして学校へ運ぶのです。役割分担して備品を買ったりと1ヶ月前から電話で連絡を取り合うのですが、徐々に雰囲気盛り上がってきます。当日は朝から3時まで立ち通しですが、お陰様で毎年完売する事ができメンバーの満足度も100%。今年は24,331円を寄付することができました。翌週は地元のレストランで楽しい打ち上げの会をしています。この時メンバー同士の一体感がいやが上にも増し、さあ明日も夜明け前の暗い中子供のためにお弁当を作るぞ！という活力が湧いてくるのです。

学校からは遠く不便なところに住んでおりますが、こういう暖かいメンバーの触れ合いと学校への熱い想いが花開くIFでのバラの販売。準備段階から支えて下さったIF委員会のスタッフの方々と、きれいだわと言って買って下さった皆様に心よりお礼を申し上げます。

(池山潤子 8・11年生保護者)



チャットコーナーカット保護者会広報委員

みなさんもこの"チャットコーナー"にどしどし投稿して見ませんか。日々の暮らしのこと、旅のこと、最近出会った話、こわい話など何でも結構です。広報委員が、インフォメーションセンター横の投稿ボックスまでどうぞ。

## 2～3月行事予定

月	日	曜	行事
2	03	水	APAC男子バスケット女子サッカー(7日まで)
	05	金	高等学校入学選考(6日まで)
	08	月	新カリキュラム保護者説明会(中3以上対象)
	11	木	建国記念の日(休校)
	12	金	新カリキュラム保護者説明会(中1、中2対象)
	19	金	中学部・高等部冬季コンサート(16:30～)
3	6	土	高等学校卒業式(10:30～)
	12	金	関西リーグ女子バスケットボール(13日まで)
	17	水	編入選考
	19	金	冬学期終了・中学校卒業式

### スクール・カレンダー変更

2月8日(月)、9日(火)の高校入試を、2月5日(金)、6日(土)に変更します。尚、5日の授業等平常通りです。

### 第6回高等学校卒業式

3月6日(土)午前10:30より本学園体育館にて、第6回高等学校卒業式を行います。

### 編集後記

先日、「タバコの害」についての本を読んで生徒と考える機会がありました。その中でポイントになったのは次の3点でした。一つ目は、主流煙(喫煙者が吸う煙)よりも副流煙(タバコの先から立ち昇る煙)の方がはるかに毒性が強いこと。二つ目は、タバコの煙は身近な環境を汚染していること。そして三つ目は、喫煙者の周囲の人がその煙を吸わされている状態は人権侵害であるということでした。

言い換えれば、人前で喫煙するということは、自分の健康を害するだけでなく環境汚染・人権侵害という2つの罪を同時に犯していることとなります。過去の自身の反省を踏まえ、このことを自ら気づく人が増えればよいと思いました。

インターカルチャーの記事、短信、感想など、E-mailでhbaba@sif.minoh.osaka.jpまでお送り下さい。バックナンバーの抜粋も本学園ホームページでご覧いただけます。URL <http://www.sif.minoh.osaka.jp/>

編集：馬場博史(数学科) 保護者会だより記事：保護者会広報委員 カット：イラストレーションクラブ生徒  
 Edited by Hiroshi Baba(Math.) Cooperated by the Public Information Committee of OIA Parents Association Drawn by the students of Illustration Club

### Senri International School Foundation (SISF)

Osaka Intercultural Academy (OIA)  
 ="Senri International School (SIS)" from Apr. 1999  
 Osaka International School (OIS)  
 4-4-16, Onohara-Nish, Minoh-shi, Osaka 562-0032, JAPAN  
 TEL 0727-27-5050 FAX 0720-27-5055

### 学校法人千里国際学園(SISF)

大阪国際文化中学校・高等学校(OIA)  
 ="千里国際学園中等部・高等部(SIS)" 1999年4月より  
 大阪インターナショナルスクール(OIS)  
 〒562-0032 大阪府箕面市小野原西4丁目4番16号  
 電話0727-27-5050 FAX 0720-27-5055

### 年間発行予定と主な内容 ( )は発行時期

- 5月号(上旬) 卒業式入学式、大学等合格状況、関西リーグ、APAC(Asia Pacific Activities Conference)
- 6月号(中旬) 学園祭、関西リーグ、スポーツ表彰式
- 10月号(上旬) 夏の宿泊行事、夏の諸活動
- 11月号(中旬) 運動会、APAC、玄関コンサート
- 2月号(上旬) オールスクールプロダクション、関西リーグ
- 3月号(中旬) APAC、中学入試結果、卒業生へ贈る言葉  
 [注] 関西リーグ、APACはスポーツ公式試合

千里国際学園では、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う大阪国際文化中学校・高等学校 Osaka Intercultural Academy (OIA) と、4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS) とが、同一敷地・校舎内に併設されています。

本学園は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等をOIAとOISが合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、この形態での参加を認めるインターナショナルスクール関西リーグ等の公式試合に参加しています。このため、2校合同の授業・行事・活動等は、インターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生(日本の小学6年生～中学2年生)をミドルスクール(MS)、9年生～12年生(日本の中学3年生～高校3年生)をハイスクール(HS)と呼んでいます。